

医薬品産業の現状と将来



土屋 裕弘氏

つちや・みちひろ 田辺三菱製薬株式会社代表取締役社長 社長執行役員

▶京都大学大学院薬学研究科製薬化学専攻博士課程修了、田辺三菱製薬株式会社経営企画部長、研究本部長を経て平成23年6月より現職

▶株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役、株式会社地球快通化インスティテュート取締役を兼務

世界の医薬品市場は、米日欧の先進国市場の成長が鈍化し、BRICsなどの新興国市場が急成長を遂げている。国内においても、医薬品産業を取り巻く環境は、新薬創出確率の低下、薬価改定をはじめとする医療費削減策の推進、企業間競争の激化といった時流の中にある。そうした状況で、従来のブロックバスター型のビジネスモデルが限界を迎え、各製薬企業の戦略は多様化してきている。

医薬品は、「モノ+情報」が一体となってその価値が生まれる。医薬品は、それ自体が知識・技術・情報・知恵などの集積体であり、医薬品を扱う医薬品産業は、まさに情報産業といえる。

また、医薬品には、「有効性」と「安全性」という本質的価値と、「使いやすさ」、「安心感・信頼性」、「使用に関する情報」という付加的価値がある。そして、製薬企業の経営においては、前者は「創薬」、後者は「育薬」という2つの局面として捉えることができる。「創薬」、「育薬」という経営はいずれもプロダクトに立脚しており、「創薬」は研究開発力、「育薬」は情報への感受性が競争力の源泉となる。

いつの時代も、画期的な医薬品は、パラダイムシフトを促すイノベーションによって創出されてきた。イノベーティブな新薬の創製例として、当社オリジナルの製品(多発性硬化症治療薬イムセラ、2型糖尿病治療薬カナグリフロジン)について触れる。

いま、日本の産業構造は一貫して高付加価値の方向へ変化してきている。医薬品産業は、省資源、省エネルギー、知識集約型の高付加価値で日本に適した産業であり、日本経済の成長を牽引するリーディング産業の1つである。そして、その原点は、研究開発にある。

アンメット・メディカル・ニーズに応える新薬を創製し、世界の患者さんに提供しつづけていくという「夢の実現」に向けて、研究開発の重要性、研究者の心がまえなどについて大切に思うことを述べたい。